



世界の農業・農政

ロシアの穀物を巡る状況

政策研究調整官 長友 謙治

1 穀物輸入国から輸出国への転換⁽¹⁾

かつてソ連は世界有数の穀物輸入国でしたが、ソ連崩壊の後、ロシアは2001/02年度⁽²⁾以降穀物の純輸出国に転換し、小麦の主要輸出国の一つとなりました。その背景は、畜産業が縮小し飼料穀物需要が激減したことです。

ソ連時代には国策として畜産物の国内生産と消費者への安価な供給を確保していました。畜産物は生産者価格を下回る価格で消費者に販売され、生産者に対しては安価な資材供給等の措置が講じられ、飼料穀物の不足は輸入で補われていました。ソ連崩壊後これら政策が廃止された結果、畜産物の小売価格が上昇し、所得水準下落と相まって畜産物需要が縮小しました。加えて輸入自由化によって畜産物の輸入が増加しました。これらの結果、畜産業が急激に

縮小したのです。

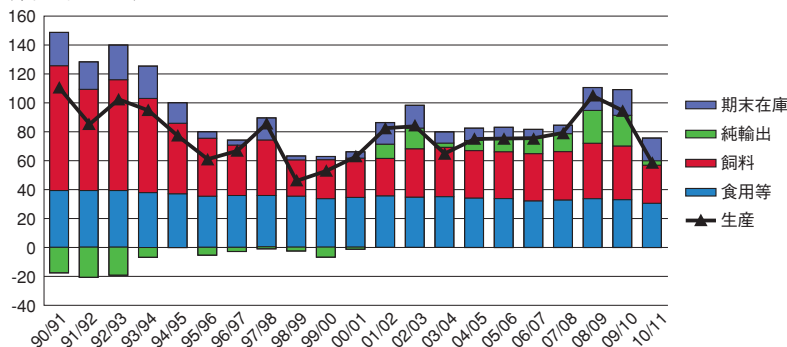
畜産業の縮小は飼料穀物需要を減少させましたが、90年代には市場経済移行に伴う混乱の中で穀物生産も減少したため、ロシアは穀物純輸入国に止まりました。穀物生産減少が底を打ったのは1998/99年度です。98年はロシア金融危機の年でしたが、後で見るようにそれを契機に小麦を中心として穀物生産が復活していきました。その一方で畜産の回復は遅れ飼料穀物需要の増加は緩やかでした。こうして増産された小麦は輸出へと向かっていったのです（第1図）。

2 小麦の生産増加の要因

ロシアでは冬小麦と春小麦が栽培されます。冬小麦は比較的温暖なヨーロッパ・ロシア南部が中心で、生産量が多いのは北カフカス経済地区（小麦産地として重要な連邦構成主体はクラスノダール地方、スタヴロポリ地方、ロストフ州）です。全国の平均単収は2.8トン/haです。春小麦は寒冷なウラル、シベリアの南部が中心で、生産量が多いのは西シベリア経済地区（特にアルタイ地方、ノヴォシビルスク州、オムスク州）です。全国の平均単収は1.4トン/haです⁽³⁾。

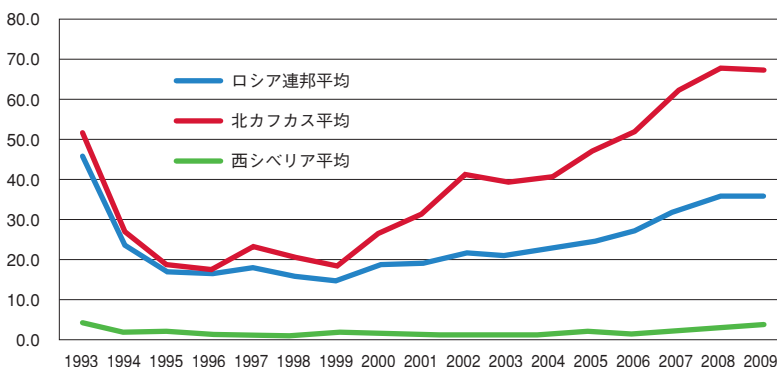
2000年代にロシアの小麦生産量が増加した最大の理由は、冬小麦の単収増加です。単収と収穫量の増加が著しかったのは北カフカスで、この時期の小麦総収穫量増加の約半分を同地域が占めました。筆者が北カフカスと西シベリアの小麦単収増加に天候（降水量、気温）、無機肥料受入量、作付面積の変化がどの程度寄与しているか分析を試みたところ⁽⁴⁾、北カフカスの冬小麦単収増加においては無機肥料投入量の増加が重要な役割を果たしているとの結果が得られました。西シベリアでも2000年代前半に春小麦単収が増加しましたが、こちらは降水等に恵まれたことが主要因と見られました。西シベリアでは無機肥料投入量はほとんど増加しておらず、小麦単収増加に対して統計上有意な寄与は認められませんでしたし

（単位：百万トン）



第1図 ロシアの穀物需給構造

資料：USDA。純輸出の負の値は純輸入。年次はロシアの農業年度。



第2図 ロシアの無機肥料投入量（穀物播種地1ha当たりkg）

資料：ロシア連邦統計庁による有効成分100%換算値。北カフカスは、クラスノダール地方、スタヴロポリ地方、ロストフ州。西シベリアは、アルタイ地方、ノヴォシビルスク州、オムスク州の平均値。

た（第2図）。

北カフカスと西シベリアで無機肥料投入に違いが生じた理由の一つは春小麦と冬小麦の単収差です。春小麦は低単収なので生産は低投入・天候依存型になります。さらに地理的な問題があります。ロシアの小麦輸出量の7割以上が北アフリカ・中東向けであり、そこに近い北カフカスが主な供給地域となっています。西シベリアは国内消費地にも輸出先にも遠く、販路確保に困難を抱えているのです。

90年代には、農業の交易条件の急激な悪化や金利の高騰により、ロシアの農業生産主体は期限超過債務の累積と著しい資金不足に見舞われ、無機肥料等の資材投入は大幅に削減されました。このため2000年前後には肥料は過少投入状態（肥料の限界生産物価値>肥料価格となり、肥料を増投すれば費用以上の収入が得られる状態）にあったと指摘されています⁽⁵⁾。

98年金融危機におけるルーブルの切下げは、ロシア農産物に価格競争力を与えるとともに、農産物価格の引上げと農業の交易条件の改善をある程度可能にしました⁽⁶⁾。さらに金利も低下しました。また、ロシア政府も農業生産主体の債務整理、再建困難者の破産処理等の対策を講じました。その結果2000年代には農業生産主体の財務状況の改善が進み、資金も利子助成融資等により積極的に供給されるようになりました（第3図）。こうして農業生産主体の資金制約が緩和された結果、生産資材の投入増加が可能になったと考えられます。

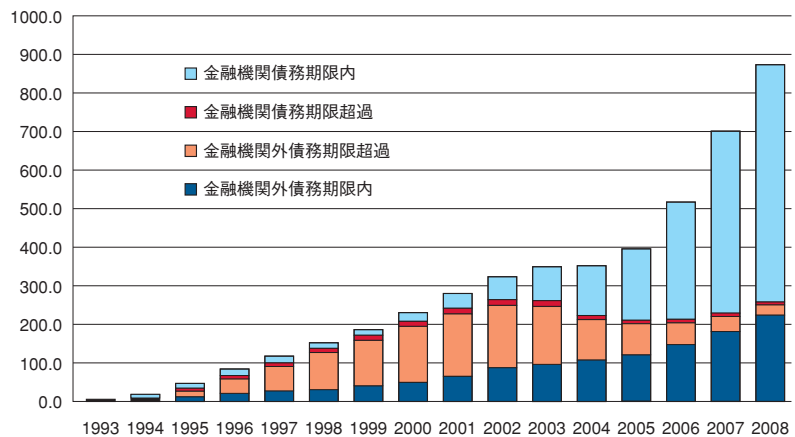
ロシア農業の交易条件は、98年金融危機後一時的に改善した後、再び悪化が進んでいます。その中で無機肥料投入量が増え続けたことについては、依然無機肥料が過少投入状態で、肥料投入に要する経費以上の収入が得られていたから、と解釈することが可能ですが、実証はできていません。無機肥料等の資料投入面の改善による小麦単収増加の動きが今後も続くのか、という問題と関係して解明すべき課題です。

3 穀物輸出国としてのロシアの課題

現状、ロシアの穀物生産量は年間8千万トン程度、輸出量は1千5百万トン程度ですが⁽⁷⁾、ロシア政府は、今後10~15年で生産量1億2千万~1億2千5百万トン、輸出量3千万~4千万トンに増やしていこうとしています。その際には以下の課題があると思われます。筆者はこうした課題に留意しながら今後もロシアの動向を把握していきたいと考えています。

① 小麦輸出に特化し、かつ低質小麦の割合が高いことが輸出市場を狭め、輸出量増大と輸出先

債務金額（単位：97年まで1兆ルーブル、98年以降10億ルーブル）



第3図 ロシアの農業企業の債務

資料：ロシア連邦統計庁。

多角化を阻害する可能性があること。

- ② 厳しい気象条件等から穀物の生産が不安定で、かつ穀物の国内安定供給の政策的優先度が高いため輸出禁止等の措置を取ることがあり、輸出の安定性に不安があること。
- ③ 穀物の物流インフラに保管施設の容量不足・老朽化、港湾の積替能力不足等の問題があり、これを改善しないと生産・輸出の一層の増加に対応できないこと。
- ④ 食肉の関税割当制度の強化（関税割当数量の削減と二次税率の引上げ）や国内生産振興（畜産投資に対する利子助成融資等）によって畜産物の自給率向上が進められており、今後飼料需要の増加が穀物輸出余力に影響を与える可能性があること
- ⑤ 穀物の生産・流通コストが上昇しており、価格優位性が低下する可能性があること。生産性向上の鍵は単収増加であるが、品種改良や生産技術・経営管理の改善がなければ無機肥料投入量増加の効果には限界があると考えられること。

注

- (1) 1については、野部公一『CIS農業改革研究序説』、「ロシア農業・農業政策の変遷」（平成18年度農林水産省海外情報分析事業）、山村理人『ロシアの土地改革：1989~1996年』、『現代ソ連の国家と農村－農産物調達制度をめぐって』ほかの文献を参考にした。
- (2) ロシアの農業年度は、7月1日から翌年6月30日まで。
- (3) ロシアの冬小麦及び春小麦の全国平均単収は、2005年から10年までの平均値で、ロシア連邦統計庁公表の収穫量及び作付面積から計算した作付面積ベースの数値。
- (4) 資材搬入の面では農業機械の燃料や部品の調達が可能になり適期稼働が可能になったこと等も小麦単収増加に寄与した可能性があると思われるが、数量的なデータが得られず分析に取り込むことができなかった。
- (5) William M. Liefert, "The allocative efficiency of input use in Russian corporate farms," in Zvi Lerman, eds., *Russia's Agriculture in Transition*, pp. 305-326
- (6) 野部公一「ロシア農業・農業政策の変遷」8頁
- (7) USDAのロシア穀物需給表による2005/06年度から2010/11年度までの平均値。